

「2024年度東洋学へのいざない」

「紅衛兵とは何だったのか」

— 習近平中国によみがえる恐怖 —

2024年12月12日

担当：諏訪一幸

<構成>

1. はじめに
2. 紅衛兵と文革
3. 1950年代後半の中国
4. 文革前夜の社会状況
5. 紅衛兵の誕生と文革の開始
6. 紅衛兵の退場
7. 習近平時代の紅衛兵
8. おわりに

1. はじめに

(1) 紹介書籍

張承志著、小島晋治、田所竹彦訳

『紅衛兵の時代』（岩波新書222、1992年）

(2) 副題「習近平中国によみがえる恐怖」

→ 中国人自身にとっての恐怖

(3) 講義の内容と目的

①1960年代後半の中国政治状況

②習近平中国を知るための有益な参考材料

2. 紅衛兵と文革

(1) 「紅衛兵」とは、文化大革命（文革）初期（1966～68年）に「造反」（社会全体における下剋上）を行った毛沢東チルドレン

→ 「紅衛兵」命名者である著者は1948年生

(2) 「文革」とは？

→ 毛沢東による政敵（劉少奇）排除、官僚組織破壊、古い文化の否定、……

(3) スライドで見る紅衛兵と文革

3. 1950年代後半の中国：

非現実的政策の開始

- (1) 1957年、「反右派闘争」で言論を封殺した毛沢東
- (2) 1960年前後、全国で「3年に及ぶ恐るべき飢饉」(6頁)
 - ①原因は、1958年からの大躍進と人民公社
 - ②農村を中心に、全国で千数百万人から三千数百万の餓死者。カニバリズムも

4. 文革前夜の社会状況

- (1) 文革は突然始まったのではなく、一定の社会状況が存在
- (2) 「中国の高等教育に存在した出身による差別などの歪みと、そうした不合理を漠然と感じながら理想を追い求めていた生徒たちのエネルギー — それが来るべき文革期の動乱の重要な原動力ともなった」(26頁)
 - 「出身」とは政治的バックグラウンド

- (3) 清華大学付属中学に在籍する「高級幹部の子弟たちは、自分たちが特別な優遇を受けていないことに不満を感じた」(35頁)
→ 「親の七光り」は日本以上の中国

- (4) 当時存在した対立軸や矛盾
- ①権力をめぐる対立
→ イデオロギー的に造反派か、守旧派か
 - ②階層を巡る対立
→ 高級幹部の子弟であるか、一般子弟であるか(幹部か大衆か)
 - ③所得と資産をめぐる対立
→ 豊かであるか、貧しいか

④階級をめぐる対立

→ 紅五類（「出身」の良い労働者、貧農下層中農、革命幹部、革命軍人、革命烈士）か、黒五類（「出身」の悪い地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子）か

⑤教育をめぐる対立

→ 高学歴・知識人であるか、低学歴・非知識人であるか

⑥職業身分をめぐる対立

→ 正規工であるか、非正規工・臨時工であるか

⑦民族をめぐる対立

→ 漢族であるか、少数民族であるか

⑧海外関係をめぐる対立

→ 海外と関係があるかどうか

（中兼和津次『毛沢東論』276～277頁）

5. 紅衛兵の誕生と文革の開始

(1) 1966年5月29日、清華大学付属中学（日本の高校）に「紅衛兵」誕生（51～60頁）

- ①「官製でない、共産党の直接の指導を受けない秘密結社」が誕生、「才華溢れる左派の学生組織が『学校』という存在に挑戦」
- ②「創始期において、紅衛兵と毛沢東本人との『私』的關係はまだ結ばれていなかった」

(2) 党中央政治局拡大会議（5月4日～26日）、文革の指導的文書「五一六通知」を採択

- ①奪権闘争、批判闘争の呼びかけ
- ②「我々の傍らに眠るフルシチョフのような人間に十分注意せよ」

(3) 著者を含む初期紅衛兵は、「大躍進政策失敗の原因の追究の方向ではなく」、「調整政策の中で再生産された党官僚の支配体制への『造反』の方向に向かった」。この点、「文革を考え始めていた毛沢東の方向と一致」（208～209頁）

①「調整政策」とは、大躍進、人民公社の失敗を受け、中央集権的手法で、経済建設中心の国造りを進めようという政策。その最高責任者が、文革開始とともに失脚する劉少奇や鄧小平

②現状に不満を持つ毛沢東は現場の「自主性」を重視



紅衛兵と毛沢東がシンクロ、毛が利用

(3) 異なるタイプの紅衛兵組織と「血統論」

①初期の紅衛兵は、「血統が良い」者（紅五類）に限定（88～103頁）

- 「『血統論』に依拠して人を殴った」
- 恐らく、宋彬彬（2024年没）も
- この考え方に反対して処刑された青年

②「三世代」の紅衛兵（121頁）が勢力争い

- 第一世代は、筆者のように、学校当局批判を行った北京市内の「老紅衛兵」
- 第二世代は、紅五類出身者からなる、全国各地の「血統兵」
- 第三世代は、党中央による血統論批判をきっかけに全国各地に誕生した、大衆組織である「紅衛兵」

6. 紅衛兵の退場

(1) 劉少奇らの排除と既存の秩序破壊完了

- 結果的には、これが、文革における紅衛兵の役目
- 役目を終え、無用の長物となった紅衛兵
- 1968年に始まる「農民に学ぶ」として行われた「上山下郷」（下放）（167頁）政策は、単なる厄介者払い

(2) 文革と習近平（1953年6月生）

- ①父親（習仲勳）は文革前の1962年に失脚
- ②1969年に下放される（当時15歳、北京市内の中学生）までの生活状況不明
- 習近平は紅衛兵にはなれなかった？
どのような紅衛兵だった？
- 習近平は文革の犠牲者か？
- 下放以降の略歴から見ると、むしろ受益者なのでは？

7. 習近平時代の紅衛兵

(1) 共産党は文革の誤りを正しく総括せず

①文革は「指導者が誤って発動し、反革命集団に利用され、党、国家及び各民族人民に深刻な災難をもたらした内乱」

(1981年「歴史決議」)

→ 「党、国家及び各民族人民」への免罪符

②農村で経験を積み、毛沢東思想の優等生として大学入学を果たした習近平

(2) 習近平チルドレンの誕生？

①学校教育

→ 2021年、小学校から大学院に至るまで、「習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想」(習近平思想)に関する教育を指導要綱に追加

→ 例えば、小学校教育では、「習近平総書記が全党全国人民の導き手であることを知らしめる」

②家庭教育

- 家庭教育促進法（2022.1.1施行）
 - 未成年の子供がいる両親等の責任
 - 「徳智体美勞が全面的に発展した社会主義建設者、後継者を養成」（第1条）
 - 「習近平」はないが、「愛党」1回、「社会主義」4回、「中華民族」5回



プライベート空間にも党は介入

8. おわりに：結論と問いかけ（仮説）

（1）紅衛兵とは何だったのか？

- ①1960年代の中国社会の矛盾の縮図
- ②既成秩序や制度の破壊に共通点を見出した毛沢東によって政治利用された紅衛兵
- ③利用価値がなくなり、わずか2年で歴史の表舞台から消える

(2) 紅衛兵運動に代表される文革の凄惨さを
「自分事」として総括、反省しない中国共産
党と一般大衆

→ 「加害者」としての認識欠如

→ 新たな紅衛兵が誕生しうる地盤①

(3) 習近平にとっての文革

①文革以前に父親が失脚していたため、文革
そのものによる被害者意識は相対的に低い

→ 一方で、文革以前の幼少期から厳しい
生活環境にあったことから、「安全」
や「安定」をことのほか重視

②下放以降の経歴（毛沢東思想、大学入学、
国防大臣秘書）からして、習近平は文革の
受益者

→ 新たな紅衛兵が誕生しうる地盤②

(4) したがって、

- ① 文革を「自分事」として総括しない共産党と大衆の存在、文革受益者指導者の存在で、第二の文革も起こりうるのではないか？
- ② 「強さ」に拠って、「安全」確保に絶対的価値を置く「習近平思想」がしみ込んだ学生は、「習近平の紅衛兵」として、中国（と国際社会）に混乱をもたらす元凶になる？



しかし、思想政治学習に無関心な、
絶対的多数の中国の若者の、
「柔軟性」に期待

＜参考書籍＞

1. 大里浩秋編『文化大革命ポスターを読む』
東京大学出版会、2024年
2. 国分良成編著『中国文化大革命再論』
慶應義塾大学出版会、2003年
3. 中兼和津次『毛沢東論 真理は天から降ってくる』名古屋大学出版会、2021年
4. 山本市朗『北京三十五年 中国革命の中の日本人技師 下』岩波新書128、1980年